

偉人

野口英世は偉人中の偉人だと
思っていたら

百姓の家を継ぐのが嫌で

籍を抜いたり入ったり

金を踏み倒して

女遊びをしたり

飲み倒したり

懲りずにまた

金を借り倒したり

ストーリーまがいのことを

しでかしたり

結婚詐欺まがいのことを

やらかしたり

親と上手くいかないのは

当たり前という態度

姉と喧嘩したり

故郷の人々に

毛嫌いされてでも

なお

初志を貫徹した

偉人中の偉人となり

偉人伝に載せられるには

生半可な偉人では

とても

お呼びがかからない

ということなのだろう

竹と風

竹の道を行く

青い節が気持よさそうに伸び

青い枝が涼しそうに触れ合い

青い葉が奔放に翻る

竹の道を青い風が吹く

ゴウゴウと節が揺れ

サワサワと枝が鳴り

シヤラシヤラと葉が踊る

青い風は竹の道から生まれる

真っ白だった風も

鼠色だった風も

竹の道に吹き入ると

途端に青い色に染まっっていく

青い風は空の高みへと舞い上がった

沢の水音に沈み込んだり

竹群の中に木霊となつて

住み続けたりする

竹の道を行くと

シヤンと背筋が伸びる

足先から頭のとっぺんを抜け

何かガスツと伸び上がる

竹の道に青い風が吹くと

目が醒める思いで

はるかな遠くのものに触れた

気がしたり

すっかり忘れていた

大切な問答を思い出したりする

川

男は蚯蚓を掘っていた
麦藁帽子の下には

脂だらけの顔があつて
汗と一緒に泥が流れ落ちていた

子供の熱は四十度を越え
二週間を過ぎた

男は毎日
無理矢理拌み倒し

村の医者連れてきた
医者はヤケクソだと呟き
何十本もの注射針を刺した

子供の熱は四十度を越え
吐く息が荒く熱く

だんだん間遠になった
蚯蚓を飲ませたらええ
明け方のまどろみに

かすかにか細い
ことばがひよいと降ってきた

枇杷の実が熟れていた
川の真ん中を

くちなわがゆうゆうと
横切つていった

男は一心に蚯蚓を掘っていた
男の目には

枇杷の実の金色も
くちなわのふてふてしさも
映つていなかった

揚羽蝶

わたしは病んでいた
ゆえ知れない脊椎の痛みに
心臓は激しくあえいでいた

わたしの眠りは
苦しい息遣いの中で
ふいに目覚めた
ほつかりと浅い
奇妙な目覚めであつた

まことに
果てのない荒野に
むやみやたらに
雪が降っている
のであつた

眼を開いてみると
漆黒の揚羽が
雪のいたる所に
点々と
果てもなく点々と
舞い降りたらしく
ビロードの布切れの
千切れた
荒々しい息遣いから生まれた
夥しい
花を咲かせていた

掃除

考えに行き詰まり

仕事に生き詰まり

神経を宥めることに

行き詰まったりしたときは

ネクタイを外し

ボタンを外し

時計を外し

テレビを消し

パソコンなど放つたらかし

水をジャージャー流し

腕をまくり

雑巾バケツに手を突っ込み

頭のネジを

理屈のネジを

まず緩めてみる

棚の品物を見上げ

さも大切そうに出張っている

ファイルなどを

隅に追いやり

埃にまみれた

棧などを

ほどよく丁寧に拭いてやる

自分の心を洗おうなどという

たいそうなことではない

リズムを取り戻そうなどという

たいそうなことでもない

ただ目の前の

いつも当たり前
の恰好に出張
っているやつ
の向きをひよ
いとずらして
みる

水をジャー
ジャー流し
腕をまくり
上げ
雑巾バケツ
をまぜかえ
し
頭のネジを
顔のネジを
ちよつとだ
け緩め
大あくびを
してみる

水の跳ねに
濡れ
水の跳ねを
跳ね返し
このヤロー
などと怒鳴
りながら
高笑いをし
てみる

アルキスト

煙る雨の中傘をさし

玄関を出る

ジャージに運動靴という恰好の

新米のアルキスト

歩数計を腰に

颯爽などとは

お世辞にもいえない

ヒヨコタンヒヨコタン

歩きで

かなり年期の入った

周囲のアルキストたちを

横目に眺めながら

五千歩は歩く

先日は少々欲を出し

二倍の一万歩を歩いた

一時間と四十分だ

一時間四十分も歩き続けたのは

十九歳か二十歳の頃

三郡山縦走とやらを

面白半分に

年に十回もやったとき以来の

ことかもしれない

もつとも

酔いどれて

篠栗から福岡まで国道を歩いたのは

二十歳も半ばのことであるが

それは酔いの座興の

戯れでしかない

目的をもって

ひたすら歩くなどというのは

四十年ぶりのことだ

歩くために歩くこと

これが職を辞した自分に

課された仕事といえは仕事だ

運動という運動を

したことがない身に

ジャージに運動靴という恰好は

まるで様にならないのだが

四時や五時の時間帯に

周囲のアルキストたちに習い

手ぶらで歩いているということが

なんとも落ち着かない

栗のいが

栗のいがを見つけた
春の草むらの中に

茶褐色のハリネズミが
草むらに潜んでいたのかと
驚いて後退った

草の途中で
クルリと動いたもので
小動物かと勘違いしたのだ
茶褐色の栗のいがは
おそらく枯れ葉の下にでも
埋もれていたのだろう

それが、草がフツツと

背伸びして
宙にまで伸び上がった
ものだから

一緒にフツツと
宙にのぼってきたのだ

いがの中からは
ひしゃげた実が顔を出し
クルリと動いた拍子に
日射しのまぶしさの中
くしゃみをひとつ
プシツとした

快晴

冬まつただ中の青空

雲の一点もない

この冬は北風強く雪が舞い

曇天続きだったから

まばゆいばかりの青い空

こんなにも空が高く

こんなにも澄み切って

こんなにも山影が鮮やかで

こんなにも空気が美味しい

学校のチャイムが

コロコロと響き

子供達のはしゃぎ声が

甲高く聞こえる

ゆつくりと鳥が舞い

飛行機雲がいつべんに天頂まで

伸び上がる

山茶花の花弁が重なり合って

散り敷き

モミジやカキやクリの落ち葉に

日の光がほっこり潜り込み

湯気をたてる

こんなにも空が高く

こんなにも澄み渡って

学校のチャイムが

カラコロと響き

子供達のはしゃぎ声が

甲高く聞こえる

春と海

磯部に寄せる波の音が
眠気を催させる

波の音は

きつと生まれる以前に
聞いた

なつかしい混沌とした

あのリズムの

ままなのだろう

いつかの時に

なにかの石だったか

なにかの高い雲だったか

そんな

なにかのさだったとき

胸いっぱい聞いていた

あのリズム

磯部に寄せる波の匂い
新しくて

途方もなく

古くて

なにがなしにゆかしい

ほとんど

胸が詰まってしまうほどに

切なく

涙ながらに聞いていた

あのリズムの

ままなのだろう

いつかの遠い時に

なにかの草花だったか

なにかの高い雲だったか

そんな

なにかの田だったとき

無我夢中で聞いていた

あのリズム

遙かな眠りのときと

幾百千ものどだったとき

すっかり満ち足りて聞いていた

あのリズムに

つい誘われていってしまふ

春の海の

波の音に

雪

空を縦横無尽に雪が舞う

台風を思わせる北風にのって

北風とはいえ

西から吹き込んだり

東に回り込んだり

地面を掬い上げたり

頭上から威圧してくるのだった

風の向きはコマネズミ同様に

変わる

雪は縄目に似た道筋をつくり

空を流れたり

雪同士がぶつかったり

ひよいと交わしたり

右に走ったり

左に流れたり

旋回して戻ってきたり

気ままに舞い躍る

今朝の雪は頬を激しく打つけれど

北風は激しく向かってくるけれど

そんなに痛くもないし

寒くもないのはなぜだろう

空を縦横無尽に雪が舞う

台風ほどにも激しい北風にのって

地面を掬い上げたり

頭上から威圧してくるのだった

するけれど

クリスマスソングでも

流れ出してきそうに

胸をときめかせてしまう

雪が明るい光を

纏っているからだろうか

空を縦横無尽に舞うとき

折りからの日の光とともに

喜びに乱舞しているかのごとくに

翻るからだろうか

黄色いランドセルの上にも

雪が高く渦巻き

大きな歓声をあげているのは

おそらく

子供たちだけではないだろう

埃

埃を払う

埃を拭き取る

埃が舞い上がる

埃が降ってくる

自分の小さな部屋を

職場のこびりついた窓を

伽藍の天蓋を

六十万石の天守を

年の終わりに

男が

係員やパートタイマーが

小僧達が

町内会の世話人達が

雑巾を濡らし

はたきをかけ

青竹を差しのばし

埃を払う

年の終わりの埃は

渦を巻き

蛇のとぐろのかたち

竜巻のかたち

男達の頭に

小僧達の衣に

野球帽の頭上に

煤となって舞い降り

煙となって湧き上がり

カオス（混沌）の式

やがて

幔幕の向こうに

嵐が引きゆくかに

飛び去ってしまうのだから

不思議だ

実に摩訶不思議だ

深呼吸

頭の芯が煮詰まっていたり

神経が絡み合っていたりすると

首痛く、頭重く、胃が張り

重たい自分に

変わってしまう

眠れない

起きあがれない

生欠伸を連発する

些細なことに傷つく

頭の芯が煮詰まっていたり

神経が絡み合っていたりすると

腹の辺りにどろりと

気持の悪い気配があり

首筋が凝り

血流が遅く鈍くなり

動けなくなる

現代病かもしれない

職業病かもしれない

今時の仕事は殊の外複雑で

展開が早く

息が抜けない

人間関係が冷たくなったのか

がさつになったのか

他の分まで思いやるゆとりなど

なかなか見出し出せない

身分の保障もままならないし

いつ寒空に放り出されるか

わかったものではない

そんな誠にお寒い事情だから

気持が沈み

内に籠もり

糞虫になつたりすることも

無理もないことだ

そんなとき

腹の空気を吐き出し

ありつたけ吐き出し

吐いて吐いて吐き尽くすと

腹も、頭も、肩も

楽になり

温かくなり

すつきりするのだが

深呼吸さえできないほど

疲れきっている

場合が場合のときに

万一、ビルの屋上から見下ろす前に

きな臭い瓶の蓋を開ける前に

アクセルをガツと踏み込む前に

自棄でもいい

息を吐いてみることだ

吐いて、吐いて

吸ってみればよい

吐いて、吐いて、吐いて

吐き尽くしてみればよい

六月の台風

風速三十メートル

ではあるが大型だという

珍しく朝鮮半島の方に向かいゆく

台風の間がかすめるであろう

九州にあつてさえ

一日中軒の音に似た

まぜつかえしの風が吹く

暑い

蒸し暑い

通りに出れば電線が撓み

シャツの背中が膨らむ

湿った風を切る

自転車のペダルが重い

木の葉が吹き千切られ

高く舞い散る

暑い

やけに暑い

三十九度八分というのは

関東の方のことだけど

これもこの

台風が持つて来たのだという

今の時期

このコースなど

覚えがない

覚えがないことが多すぎて

少々なことでは驚かないけれど

べったりした風は

爬虫類の舌のごとく

やけに粘り粘って

纏わり付いてやまない

秋

舞い上がった飛行機が
空を食べてしまったので
空はあつけらかんとしています

青い息を吐いているので
ズックがひとり
夕日をみがいています

街の店では
洗面器の大安売があつたので
みんな薄の穂を
くわえて歩いていきます

いましがたまで
汽車の窓から見えていた風景は
みどり色にふくれあがつた
まんじゅしゃげの心臓です

海辺では
母が寝込み

ブランコ

新しい日の光を浴び
ブランコが人待ち顔に
微笑んでいる

青いブランコに
ズツクを履いた男の子が乗った

白いブランコに
リボンをつけた女の子が乗った

青いブランコと
白いブランコは

透き通った日の光のなかを

キラリ

キラリとくぐり

交互に
空に向かい
山に向かい

高く強く
強く高く

口笛を吹きながら
気持のよい風の音を
いっぱいにくらませ

空へ空へ

山へ山へと

のぼっていった

ずんずんのぼっていった